

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2018～2021  
 課題番号：18K00409  
 研究課題名(和文) 詩学と科学のフィールド イギリス・ロマン派から現代の自然の境界・越境・改造  
  
 研究課題名(英文) The Field of Poetics and Science: Boundaries, Translations and Re-creations of Natures from the Age of Romanticism to the 21st Century  
  
 研究代表者  
 アルヴィ なほ子(宮本なほ子)(Alvey, Nahoko)  
  
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
  
 研究者番号：20313174  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』(1818)から2世紀を経た現在、『フランケンシュタイン』をイギリス・ロマン主義の文学と科学の関係、共感と文学的想像力の新たな可能性を考察する出発点とし、『フランケンシュタイン』に大きな影響を与えた同時代の作品、『フランケンシュタイン』が影響を与えた後代の作品、同時代の科学から現代にいたるまでの科学の発展と文学の関係をロマン派の作品における「他者」との関係の点から検討し、文学的想像力と共感が、人文学と科学が共同/協働してグローバル化やコロナリズムが引き起こす問題に対処する時に大きな力を発揮することを示した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、イギリス・ロマン主義文学研究における学際的研究を進めた点、人文学、社会学・科学の言説から文学テキストを検証し、文学テキストが育む想像力や共感が生み出すテキストがグローバル化と文化的多様性を前提とする21世紀に新たな視点を提供する可能性があることを示した点である。その社会的意義は、文学的想像力と共感が織りなす文学テキストが、人文学と科学が共同/協働してグローバル化やコロナリズムが引き起こす問題に対処する19世紀前半の例を示すことで、現代にも文学テキストの持つ力の重要性を示した点にある。

研究成果の概要(英文)：This study takes *Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818) as a starting point for examining the relationship between literature and science. Two centuries after its publication, *Frankenstein* is regarded as one of the most important works in British Romanticism. This project, examining *Frankenstein*, literary works in British Romanticism that greatly influenced *Frankenstein*, those literary works influenced by *Frankenstein*, and contemporary scientific writings, demonstrates the new possibilities of empathy and the literary imagination that can work in cooperation with scientific imagination. It shows how literary imagination and empathy can work collaboratively with science and together seek solutions to the problems of globalization and colonialism.

研究分野：イギリス・ロマン主義文学

キーワード：イギリス・ロマン主義 メアリ・シェリー フランケンシュタイン S.T.コウルリッジ 老水夫行

## 1. 研究開始当初の背景

イギリス・ロマン主義文学の研究は、21世紀に入ってから大きな変貌を遂げている。「イギリス」文学という各国文学の中に留まらないどころか、「文学(literature)」の狭義の意味、つまり小説、詩、批評などのジャンルに安住せず、文学に隣接する、あるいは関連する諸分野の成果を取り入れた学際的な研究がメインストリームになりつつある。歴史、哲学、美術、地域文化研究など関連する人文学の諸分野へと越境している。近年では、Juliet Shields の *Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820* (2010)、Paul Keen の *Literature, Commerce, and Spectacles of Modernity, 1750-1800* (2012)、E.J. Clery の *Eighteen Hundred and Eleven: Poetry, Protest and Economic Crisis* (2017)に見られるように、時代の問題と文化やアイデンティティの形成の関心に焦点が集まっている。また、人権、動物の権利、環境問題など、現代につながる問題とロマン主義を関係づける方向性も、世界最大のロマン派研究学会である NASSR が、2015年度の年次大会のテーマを“Romanticism and Rights”として試みている。しかし、このような文学研究の方向がまだ十分に光を当てていないのが、文学と科学のテキストの比較だけにとどまらない、両者の相互貫入的なテキストの往還的な関係のより深い考察であった。20世紀半ばに、物理学者で小説家のスノー(C. P. Snow 1905 - 80)がケンブリッジ大学で行った講演で指摘し、大きな反響を巻き起こした「二つの文化(the two cultures)」の乖離——人文知と科学知の分裂——を修復するために文学が何をなしてきた、何をなし得るかを探る方向へと向かう。Alan Bewell の *Natures in Translation: Romanticism and Colonial Natural History* (2017)のような先駆的な研究を踏まえ、本研究では、イギリス・ロマン派研究において、人文学と科学の協力と協働の可能性を文学と文学研究の側から、想像力や共感(sympathy と empathy)の動きに注目して考察することを目指した。

## 2. 研究の目的

18世紀後半から19世紀前半、地球的規模で様々な形態の移動が活発に行われるグローバリゼーションの初期形態が生まれるのと時をほぼ同じくして、自然哲学から科学が分離していった。しかし、人文学と科学はまだ同じ問題意識と語彙を共有しており、文学的想像力、共感力が、二つの分野を共同/協働させていた。文学テキストが育む想像力や共感力が、グローバリゼーションやコロニアリズムが引き起こす問題に対処する時に大きな力を発揮することを示すために、文学テキストを含む人文学、社会学・科学の言説から検証し、現実に対する有効性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

18世紀後半から19世紀前半、イギリス・ロマン主義の時代には、地球的規模で様々な形態の移動が活発に行われるグローバリゼーションの初期形態が生まれ、その諸問題の萌芽が現れた時代であった。また、それとほぼ時をほぼ同じくして、biology という英語が生まれたことが端的に示すように、自然哲学(Natural Philosophy)から科学が分離し、専門化していった。しかし、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)の祖父であったエラスマス・ダーウィン(Erasmus Darwin 1731-1802)は、医者であり植物学者でありかつ詩人であり、その著作は、最新の科学的知識と文学的想像力の両方が作り出したものであり、最新の植物学の知識を満載した詩作品『植物たちの愛の様相』(*The Loves of the Plants*, 1789)は非常によく売れ、「植物界の摂理」(*The Economy of Vegetation*)と『植物たちの愛の様相』を合本にして1791年に出版された『植物園』(*The Botanic Garden*)は、ロマン主義の詩人たちに深い影響を与えた。文学、人文学、諸科学は、それぞれの研究分野に分化しながらも、依然として緊密につながっていった。このことからわかるのは、人文学と科学はまだ同じ問題意識と語彙を共有していたことである。ダーウィンに影響を受けたイギリス・ロマン主義の時代の世代は、文学的想像力、共感力を、乖離し始めていた二つの分野をつなぎ、共同/協働させようとした。このことをテキストから詳細に検討し、文学テキストが育む想像力や共感力が、グローバリゼーションやコロニアリズムが引き起こす問題に対処する時に大きな力を発揮することを文学テキストを含む人文学、社会学・科学の言説から検証する。18世紀後半から19世紀前半のイギリス・ロマン主義の文学テキストと同時代の歴史記述、政治的言説、科学の発見や調査探検航海の報告などの現実、あるいは真理の記述を目的とする散文のテキストを詳細に検証する。人文系の「文化」を織りなすテキストと理系の「文化」を織りなすテキストの両者が共通に示す問題系、両者が、もう一方の「文化」テキストが持つ特徴をテキストに応用して問題の解決の糸口とするやり方について、内容と形式の両面から考察する。形式面については、イギリス・ロマン主義の作品群の1人称の語り、その語り手が自分の物語を聞かせる聞き手の設定について注目し、この語り手と聞き手の設定と自己の

苦しみの物語の在り方から、ロマン主義のテクストを 20 世紀後半から重要性を増した「ナラティブ・メディソン」の萌芽的なテクスト生産様式として考察する。

#### 4. 研究成果

文学テクストで示される文学的想像力、共感力が時代の最先端の科学と協働するような形で、時代の問題を提示し、その解決法を変更可能な未来のヴィジョンとして提示した。イギリス・ロマン主義の時代の詩人、小説家は、文学テクストの中に時代に先駆けて示したことを特にコウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834)、パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822)、メアリ・シェリー (Mary Shelley 1797-1851) に焦点をあて、彼らの文学テクストと同時代から次の時代にかけてのイギリス海軍に南半球や北極探検の記録、科学の言説との比較によって、二つの文化の乖離の克服への志向が共通してあることを示した。イギリス・ロマン主義の詩人、小説家は人文学諸分野、科学を連携させ、一般読者が読む文学テクストの中に重層的なレイヤーとして組み込んだ。本研究では、『フランケンシュタイン』を詩学と科学の新たな結びつきを示す作品として検討することから始め、「人間であること」を定義するとき、言葉 (人文学) と科学がいかに共振せねばならないかを、高校生と大学生のための金曜特別講座 (東京大学教養学部) において、「言葉の力と科学の力」 「フランケンシュタイン」200 周年」というタイトルで講演をおこない、それを同タイトルの論文として纏めた。『フランケンシュタイン』と 21 世紀の科学との関係については、本庶佑があげる科学者に必要不可欠な 6 つの C に加えて、人文知の知見から 7 つ目の C を加える必要性を論じた「7 つ目の C 「モダン・プロメテウス」への批判的応答」を公表し、イギリス・ロマン派の文学が現代の生命科学にとっても有効な補助線となることを提示した。多くの分野を横断し、重層化しつつ文学テクストに組み込む方法を取るロマン主義の時代の作品は、同時代だけでなく現代の諸問題に関するヒントとして読むことができる。コウルリッジの『老水夫行』(1798, 1816)、『老水夫行』や『老水夫行』が参考とした膨大な航海記、18 世紀後半のイギリス海軍の北極探検などを比較検討することから、現代科学の急速な進歩の負の側面である人間の領域を超える研究への危うさへの警鐘、現代の新型コロナウイルス感染症の状況の下での人々の「孤独」と「孤立」の問題など、イギリス・ロマン主義の時代の文学テクストに示される洞察と取り組みは、イギリス・ロマン主義の文学と科学の関係の先駆性、共感と文学的想像力の新たな可能性を示唆するものである。ロマン主義的な想像力、共感力が両方の「文化」のテクストの産出に影響を与え、新たな地平へと導く過程がこのようにして見えてくる。この時代の乖離しつつあった人文学と科学をつなぐ試みは、「人間的であるとはどういうことか」という大きな問題を人文学と科学の両面から見据えることに繋がり、それが、語り手の傷ついた精神と肉体をケアするナラティブ・メディソンとしての物語作品の効用と再評価、現代の遺伝子工学や生命の倫理の問題や社会の中の孤独という問題への示唆に富む糸口を与えることになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 アルヴィ宮本なほ子	4. 巻 24
2. 論文標題 『フランケンシュタイン』のもう一人のプロメテウス ウォルトンと「現代のプロメテウス」の人間化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ODYSSEUS	6. 最初と最後の頁 93-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 アルヴィ宮本なほ子
2. 発表標題 21世紀の「現代のプロメテウス」：ウォルトン、クローン、感覚教育
3. 学会等名 第45回イギリス・ロマン派学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nahoko Miyamoto Alvey
2. 発表標題 Frankenstein and Narrative Humility
3. 学会等名 “Emerging Medical Narratives” in UTokyo-NTU Joint Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nahoko Miyamoto Alvey and Alan Bewell
2. 発表標題 /Frankenstein/ and Manga
3. 学会等名 Romantic Regenerations（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アルヴィ宮本なほ子
2. 発表標題 七つ目のC 二人の現代のプロメテウス
3. 学会等名 日本シェリー研究センター年第27回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 東京大学教養学部（編） 分担執筆 アルヴィ宮本なほ子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 201
3. 書名 知のフィールドガイド 異なる声に耳を澄ませる	

1. 著者名 大石和欣編、分担執筆 アルヴィ宮本なほ子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 512
3. 書名 コウルリッジのロマン主義：その詩学・哲学・宗教・科学	

1. 著者名 日本シェリー研究センター	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 180
3. 書名 フランケンシュタインの世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Mary Shelleyの『Frankenstein, or the Modern Prometheus』の刊行200周年記念の2018年には、世界各地で関連するテーマで様々な学会、セミナーなどの催しが行われた。  
 アメリカのKeats-Shelley Association of Americaが世界中の大学や研究機関と連携して行ったFrankenreadsの企画に参加し、10月にKeats-Shelley Association of Americaの研究ブログでインタビューを受け、“Frankenreads Q &A: University of Tokyo”に科学と外国語との関係からの『Frankenstein』の読解を提出した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 “Emerging Medical Narrative” in UTokyo-NTU Joint Conference at UTokyo 2019	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------